

人生ハンド仏句

第33号

H. 16. 12. 1
(毎月1日発行)

供養の心

住職 谷川寛俊

今年には悲しい出来事が三つもありました。

まず第一は五月五日、皆に可愛がられた「愛犬ロク」の突然死（原因不明、四歳の若さで）

二つ目は、八月二十七日母の死、その母の百ヶ日も経たない十一月十日、家内の父親（大阪市妙法寺住職、牛居一教下九十二歳）の死、いずれも安らかな最後でした。

考えて見れば、それぞれの役目を終えて生まれてきた元の世界へ帰って行かれたわけです。きつと今頃はお釈迦様、そして大聖人様の元へ歩んで居られる事でしょう。

家内の父親は学徳兼備な方で、大阪では名実ともに三本の指に数えら

れる程のお寺を築き上げられました。苦勞されて、一からご信者を作り上げ、大阪市東住吉区に妙法寺というお寺の御開山として、その全ての檀家の人は改宗者でありました。

当時創価学会の全盛期の頃で、誤った教えを信じていた人達に「教学と信仰」の二本柱で改宗させ、正法に導びかれたのでした。

私もよく御前様の前に座らされ、夜遅くまで眠い目をこすりながら法門を聞かされたものでした。今思えば、大変貴重なお話で、テープに録音しておけば良かったと後悔しているところです。

亡き人の霊は、四十九日を過ぎると、未だ修行中の身であり、特に生前中に悪業の因縁の深い人は、果たして仏様のもとへ行けるかどうか分かりません。だから老周忌、参回忌などと法要を営むわけで、これを追善法要と言うのです。遺族が供養し、その功德を故人の霊に差し向けるのであります。ですか

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjyujitoyama108/>

ら本来は一人でも多くの親類縁者を集め、おもてなしをし、その集まっていただいた善根の功德を今は亡き人に回向する事によって、それがやがて必ず自分のもとに戻ってくるものであります。

最近では、いろいろと経費がかかるからと言ってとかく身内のみで行ってしまうケースが増えていますが、供養の意味からすると、多少無理をしても亡き先祖様の供養は言い換えれば、自らの罪障消滅と子孫に対する最良の徳を残している訳であります。

家内の父親も良く言っていました、
「出すから来る」のです。だから「出来る」とか、ものごとが「成就する」と言う意味になるわけであり、

「出入り口」と言いますが、「入り出口」とは言いませんヨネ。

いづれにせよ亡き人に最善の真心を供養することによって、次第に成仏していける訳であります。

故人の霊を弔うのはお寺やお墓、或いは仏壇で供養することは勿論ですが、最も大切な事は思い出して上げる事であり、
そうするとそれが故人の霊に伝わり、
霊も話し掛けて下さいます。
苦しい時、悲しい時、楽しい時、大事な時、静かなところで故人を思い出し、声をかけて上げて下さい。
きつと何か語りかけ教えて下さることと思えます。

冷や酒と親の意見は後で